

# 東京から——蕭紅書簡（下）

## 翻訳と注釈

平 石 淑 子

本稿には、蕭紅が留学先の東京から当時同居していた蕭軍に宛てた手紙のうち、魯迅の死（1936.10.19）後に書かれた第二十五信（1936.10.29）から帰国直前に書かれた第三十五信（1937.1.4）までを収める。「東京から——蕭紅書簡（上） 翻訳と注釈」（『日本女子大学文学部紀要』第66号、2017.3）に続くものである。なお、訳文中の〈 〉は筆者による注である。

### 第二十五信（1936年10月29日）

均〈蕭軍〉<sup>1)</sup>：

書留は受け取りました。41円25銭の為替は、明日取りに行きます<sup>2)</sup>。20日に1通、24日にもう1通出しましたが、多分どちらも届いているわね<sup>3)</sup>。

あなたの部屋はちょっと値が張るけど、大丈夫、冬を越してからにしましょう。外国人のところは、大抵悪くないわ<sup>4)</sup>。冬は暖炉を置いて、2～3ヶ月暖かく暮らしたらまた考えましょう。家賃が高くて、もう引っ越さなくていいと思う。1人よりはやっぱり2人。冷え冷えと冬の夜を過ごすなんて、氷山に追いやられたみたい。多分あなたは違うわね。でも私は駄目。私はいつもこんな意気地無し。3ヶ月会わないけれど<sup>5)</sup>、意気地無しはやっぱり意気地無し。でも帰るかと言えばやっぱり帰らないわよ。奇が来たら、明たちと一緒に賑やかにやってください<sup>6)</sup>。

お金が入ったと思ったらもうなくなりそう。裏の付いた外套を買いたい。ここ何日かとても冷えてきました。残ったお金は11月1ヶ月分には足りないと思います。100円何とかならないかしら。次の手紙で教えてください。旅費さえ手許にあれば安心ですから。

ここ数日、のぼせがひどくて、唇もすっかりひび割れています。実際人が死ぬのは仕方のないことです。でも、道理は道理と分かっている、気持ちの上では全然駄目。私たちが上海に来たばかりのころ、1人の人〈魯迅〉以外に知っている人は誰もいなかった。冷え冷えとした亭子間<sup>7)</sup>で先生〈魯迅〉の手紙を読んだわね。先生だけだった、2つのさすらう魂を慰めてくださったのは<sup>8)</sup>！……ここまで書いたら胸が詰まってきました。

均：童話はまだ始められない。その計画も立てていません。難しすぎる。私の人生経験ではとても足りない。今2万字のものを書き始めています。恐らく来月5日には書き上がります。その後、10万字のを書くつもりです。12月のうちにはあなたに原稿を読んでもらえると思います<sup>9)</sup>。

日本語は少し分かるようになりました<sup>10)</sup>。

日本の楽器の「琴」が隣の家から聞こえています。ふるさとが恋しいんじゃない、何かを思う

のでもない、ただ泣きたくなる。

もう何も書くことはありません。

河清〈黄源〉<sup>11)</sup>によろしく。

吟〈蕭紅〉 10月29日

## 第二十七信<sup>12)</sup> (1936年11月6日)

均：

「第三代」<sup>13)</sup> はよく書けているわ、まだいくつも読んでいないけれど。

「為了愛的緣故」<sup>14)</sup> も読みました。あなたは本当によく覚えているわね。私はあんな細かなこと、みんな忘れてしまったわ。

なぜだか分からないのだけれど、また40円の為替が届きました。郵便局から送ってきたのだけれど、この前のが届いていないと思ったんじゃない？

私は毎日まだ4時からの授業があります。自分では少し日本語が分かるようになったと思う。でも本を1冊手に取って読んでみても、まだ何も分かりません。まだ駄目ね。多分もう2ヶ月くらい頑張れば読めるようになるんじゃないかしら。自分がそうなりたと思っているだけだけれど。

奇〈袁時潔〉は来ましたか<sup>15)</sup>？

あなたはやっぱり引っ越さないで、私の考えはそうです<sup>16)</sup>。

あの「愛……〈為了愛的緣故〉」の中では、芹はほとんど幽霊みたいね<sup>17)</sup>。読むと自分でもぞつとする。自分では自分が分からないから。私たちが喧嘩をするのはいつもそんな原因——つまり1人のためを考えるのか、たくさんの人のためを考えるのか、というところにあるんじゃないかと思います。これからはもうあんな風にあなたを邪魔したりしたくないわ。あなたにはあなたの自由があるのだから。

御元気で

吟 11月6日

手袋はまだ送っていません。河清〈黄源〉にも1つ買ってあげようと思っているから<sup>18)</sup>。

## 第二十八信 (1936年11月9日)

均：

昨夜1通、今朝1通受け取りました。

L〈魯迅〉を追憶するような文章は、すぐには書けません。書くのが難しいのではなく、気持ちの上で整理が難しいからです。そもそも生きている人間が、彼が死んだ、と言わせようとするなんて！そんなふうにと考えるととても辛い<sup>19)</sup>。

許〈許広平〉は、まだほかの人のことを心配しているの？自分がほかの人たちに心配されなければならぬのに<sup>20)</sup>。

「刊行物」はどんな性格のもの？『中流』と同じようなもの<sup>21)</sup>？どうして胡〈胡風〉<sup>22)</sup>の書いたものをこの頃見ないのかしら。これから手袋を2組送ります。河清〈黃源〉に1組、あなたに1組。

短編はまだ書き終わっていません<sup>23)</sup>。終わったらすぐ送ります。

御元気で。

栄子 11月9日

第二十九信（1936年11月19日）<sup>24)</sup>

均：

夜熱が出るし、この1ヶ月、唇があちこち切れて、気持ちもざわざわしているので、仕事も手つかずのままです。役に立たない、茫洋としたことを考えてしまう。文章はすぐには送れません。

絵を3枚買いました。東の壁に1枚、北の壁に1枚。1枚は1人の男と1人の女が長い廊下で会っている絵です。廊下の端には琴を弾く女性が立っています。もう1枚は戦争に関係したものの。壊れた部屋の中で花瓶が割られている。お酒を飲んだから。緑のズボンをはいた軍人が踊っています。私が一番好きなのは3枚目。1人の子どもが軒下で寝ているのです。椅子の上で、座布団にもたれて。側にやって来たのはたぶん彼女のお母さん。垣根の外で大きな鎌を担いでいるのは多分お父さん。軒下は四角い石の石畳になっていて、遠くがほんのり赤味を帯びた夕暮れ時、かやぶきの屋根、庇の下には四角い窓が開いている。その子のだらんと垂れた両足。本当に素敵。本当を言うとね、その女の子を見ていると、自分を見ているような気持ちになるの。私も小さい頃はあんなだった。だから私はその子が大好き。権力者を頼るのだって、少しは知恵を働かせる必要があるけれど、そんなことはしなくてもいい。どっちみち自分に一番大事なものは仕事なのですから——大切なことを第一に考えるなら、やっぱり仕事です。自分でやろう、誰に頼るの？誰が頼られる人になるの？勝手にすればいい！ある方面について仕事のできる人を集めてグループを作れば、大きな力になるわ。でも私は、主要な特色は人にあると思う。そんなことを言っていると悲しくてたまらない。私たちの老将〈魯迅〉が逝ってしまってまだ何日も経たないのね！

周先生〈魯迅〉の全集はすぐにできるのかしら？中国人が中国人の文章を集めるのは日本で集めるよりも簡単だと思う。こちらでは11月に全集が出版される予定です<sup>25)</sup>、本当にたいしたものだわ。胡〈胡風〉や聶〈聶紺弩〉、黄〈黃源〉たち<sup>26)</sup>とすぐに相談を始めたらいと思う。

『商市街』<sup>27)</sup>の評判が良いのも、とてもありがたいです。

莉〈白朗〉<sup>28)</sup>から手紙が来て、子どもが死んだって。あの子の運命はあまり良くなかったわね。生きている間中病氣してた。

こちらには読む本がありません。自分で腹立たしくなることがある。『水滸伝』を読もう！読みながら寝てしまうと、夜中の頭痛や悪夢が私には本当によくないのです。昨日の夜はこんな具合で眼が覚め、それからもう眠れなかった。

私のあの赤い色の酒、今まだほとんど残っています<sup>29)</sup>。一昨日たまたま大家さんから鍋を借り

て料理を作りました<sup>30)</sup>。火鉢の上で作って（そうそう、まだあなたに話してなかったわね。火鉢を買ってあったの。一昨日は日曜日だったので試してみました）。小さい机に並べて。でもいざ食べてみたら何か味気ないので、逆に感慨がありました。私は感じやすい人間ではないけれど、少しは感慨がありました。そこで大家さんの子ども<sup>31)</sup>を呼んできて、向かい合って食べました。

地震は本当に怖い。小さいのは大したことないけれど、この前のは小さくはありませんでした。2～3分間、家がガタガタと鳴り、壁で時計が揺れていました。明るくなる前だったので、灯りをつけようとしたのだけれど、地震のせいであんなに。無我夢中で上衣を羽織って下に駆け下りました。大家さんも起きて来て、逃げ出そうとするような様子でした。隣の老婦人が私を呼んでドアを開けたのに返事がない。私が下にいるのがわかって皆大笑いしました<sup>32)</sup>。

煙草はずっと吸わないことにしています。でもここ何日か、気が付くと口にくわえている。

胃の調子は良いです。食欲もあります。私たちが一番貧しかった時みたいにパンの耳もおいしい。お菓子なんかは買わないことにしています、買ったならそのまま置いておけないから。日本の食事に油分がないからでしょうね。朝ご飯は10銭、晩ご飯は20銭、お昼ご飯はパン2切れと牛乳1本。食欲があればあるほど、節制しています。胃が良くなったのが原因だと思っています。暇な時の飢えは耐えられない、というのは確かです。でも自分でここに来ているのだから、耐えられなくても耐え抜くしかありません。飢えくらいなんてことないわ。

また50円の為替を受け取りました。かなりの額ね。あなたの方も物足りでしょうから、まだお金があれば自分用に残しておいて。来年1月末まで、予算からすれば十分です<sup>33)</sup>。

ちょっと前まで、今年の冬はスケートに行きたいとずっと思っていました。ここではほかは皆高いのですが、スケート靴だけは品が良くて安いのです。古道具屋の店先に真新しいのが掛けてあって、全然中古品には見えない。靴も刃もちゃんと置いて、11円でした。それから8、9円のもいい。でもスケート場は1時間の入場料が50銭です。しかもとても遠い、電車賃を入れずにちょっと計算してみたけれど、とても行けません<sup>34)</sup>。またいつか古い絵を買おうと思っています。中国では買えるところがないから。ひとつにはここに置いておいて帰る時に持って行くように。ひとつには火鉢<sup>35)</sup>にあたりながら見れば、寂しさも紛れるし。均：あなたはこれまでこんな生活をした経験はないでしょう。さなぎのように自分を繭の中に巻き込んで。希望はもちろんあるし、目的ももちろんある。でもどれもはるかに遠くて大きい。人は遠くて大きいものにすがってばかりの生活では駄目なのよ。生活が将来のためで、現在のためではないとしても。

窓に月の白い光が注いでいる時、灯りを消して、黙って座っていたいと思う時、その沈黙の中に突然警鐘のように心に浮かび上がってきた、「これは私の黄金時代ではないだろうか？この時が」って<sup>36)</sup>。そこでテーブルクロスを撫でながら、振り返って籐椅子の縁を撫で、それから手を顔の前に挙げた。はっきり見えなかったけれど、でも確かにこれが自分の手だってわかりました。それからまたあの細い窓の棧（障子の棧）を見ました。そう、自分は今日日本にいる。自由で、快適で、静かで、気楽で、経済的にも全く心配がない。これは本当に黄金時代だわ、籠の中の。それからまた別のことが頭に浮かびました。どんなことも私のところに来るとおかしくなってしまう、タイミングが合わなくなってしまう。自分が安らかな気持ちでいることに、明らかに居心地の悪いところがあります。だからまたこの安らかさを愛しもあるし、この安らかさを恐れもあるのです。

均：またあなたの誤解を引き起こすようなことを書いてしまいました。あなたはずっと私のことを弱いと思っているから。

一昨日奇〈袁時潔〉にも手紙を書きました。彼女に渡してください！

許君〈許広平〉によろしく伝えてください。

吟 11月19日

### 第三十信（1936年11月24日）

三郎〈蕭軍〉：

突然思い出したのだけれど、姚克<sup>37)</sup>は映画の方でやっているのではないの？あの「棄児」の脚本、十分に皮影戯〈影絵芝居〉<sup>38)</sup>の形になっていると思うわ<sup>39)</sup>。書き換えたり削ったりして上演させるのは良くないんじゃない？前に進まなければならないなら進まなきゃ。文章の領域のほかに、人々の魂を啓発する世界を掴むのよ。それに今の時代、皮影戯だって気持ちを伝えるとても良いツールだわ。

こっちは、明日ある日本人の講演を聴きに行きます。政治的なテーマの。もうチケットは買っている。50銭で2回聞けるの。次は郁達夫もあるの、ちょっと聞いてみようと思います<sup>40)</sup>。

ここ何日かの間に、何度も頭痛が起きました。薬はあります。どれも大したことはないけれど、気持ち的に良くない。でも大丈夫。何日かすれば良くなるのですから。

『橋』も出版されたの？なら『緑葉的故事』も出版されたのでしょうか<sup>41)</sup>？この2冊については、あまり関心はありません。

私が今嬉しいのは、日本語がどんどん進歩していること。『文学案内』<sup>42)</sup>をばらばら見ているけれど、ちょっとわかります。素晴らしいでしょう、ほとんどわかるのよ。2ヶ月ちょっとの時間でこの成績なら、私としては満足です。でも日本語はとても簡単。ほかの国の言葉は、2年間勉強してもこんな風にはなりません。

許〈許広平〉への手紙はまだ書いていません。何を書いたらいいのか分からない。目的は彼女を慰めることなのだけれど、逆に彼女の悲しみを呼び起こしてしまってもいけないと思って。もしあの2人のおばさんたち<sup>43)</sup>に会ったら、私がよろしくと言っていたと伝えて。

あなたは必ず柔らかめの枕を買いなさい。そうでないと私は安心できない。この枕で寝てみて思い出しました。とても固い。頭痛と枕は大いに関係があります<sup>44)</sup>。

絵画にはずっと興味があります。将来はその方面に力を入れたいと思っています。フランスに行って絵画を研究したいと思っているの<sup>45)</sup>。1ヶ月100円しかかからないらしい。ここでも50円要るのだし。しかもフランスではいつでも仕事を探せるのだし。

今、気が向いた時に短い文を書き留めています。あなたには送らないわ。河清〈黃源〉に送るつもり。あなたが読んだら「寂寂寞寞〈寂しくてしかたがない〉」でなければ駄目だって言うでしょう。知らない人が見れば、少しは新しさもあるかもしれないから<sup>46)</sup>。

墓地に行って刊行物を焼くなんて、それは全く「西洋の迷信」、「西洋の愚かな田舎者」です<sup>47)</sup>。口に出すとまた悲しくなる。書き上げた原稿も焼いて先生に直していただき、後でまた発表すればいい！刊行物を焼くのは愚かだけれど、気持ちは深刻よね。

また深夜です。しかも横になって書いています。今12時前ですが、寝られません。道理で、「奥様」になるとバカになる、それから見るとほとんどバカね。

御元気で

榮子 11月24日

第二十六信（1936年11〈12〉月2日）<sup>48)</sup>

三郎：

24日の手紙、受け取りました。為替も今日やっと来ました。

于（郁）達夫<sup>49)</sup>の講演を今日聴きました。会場が大きくなかったのもう少しでドアが閉まらなくなるくらいでした。私は切符を買っていたのだけれど、買っていないのと同じで、坐る場所がなく、入口の所に押しつけられていたのですが、まあいいわ、人を見るのも嫌いじゃない。

近頃果物をよく食べます。便秘だからです。毎回お通じの時、血が出ます。

東亜学校は12月23日に第1期が終わります<sup>50)</sup>。第2期は個人教授の所へ行って勉強しようと思います。小説を読みながら、時間を少し節約して。この2ヶ月何も書いていません。恐らく忙しすぎるからです。

送ってくれた翻訳原稿も読みました<sup>51)</sup>。いいじゃない、文章が発表されたら注目されるわ。

こちらはまださほど寒くはありません。部屋では火鉢に火をおこしています。火鉢はまるで仲間のように私に寄り添ってくれています。花は、買わない。お酒も飲みたくない。どんな物にもあまり興味がわきません。夜は格子窓（障子窓）やがらんとした四方の壁を見えています。若くて情熱にあふれた人にとっては、とても残酷なことだけれど、私にとってはなかなかいい。人は中年になると少しの炎には耐えられるようになるみたいね。

珂（張秀珂）は来たければ来ればいいわ<sup>52)</sup>！面倒を見られるところは見て、できないところは彼自身に何とかさせましょう。「強いられる」なんて、何に強いられるのかわかりません。

奇（袁淑奇）たちはもう落ち着いたでしょうね。2～3年の間に戦争でめっちゃめっちゃになって、牽牛房の友人たち<sup>53)</sup>も皆ちりちりね。

許女士も苦勞が絶えない人です。幼い頃に両親を亡くし、学生時代も苦勞しながら勉強を続けた。家庭教師をしたこともあるし、授業の合間に代筆をしてあげたりもした。猩紅熱に罹った時は友だちのお父さんの家で療養したのよ<sup>54)</sup>。女士の以前の孤独が分かるわ。でも今又孤独になってしまった。子どもはまだ小さくて、母親のことを理解できない<sup>55)</sup>。近くに住んでいるのだから、私の代わりに足繁く訪ねてね<sup>56)</sup>。ほかの人たちも誘い合わせてしょっちゅう訪ねて行かなきゃ。L（魯迅）が完成させなかった事業を、私たちは受け継いでいく。でも彼の夫人は、誰に托されるの？

ここまでにします。御元気で。

榮子 11〈12〉月2日<sup>57)</sup>

第三十一信（1936年12月5日）

三郎：

暫くは無茶な真似はしないで<sup>58)</sup>。このごろそちらの気候があまりよくないことは知っています。

孫梅陵<sup>59)</sup>も来たのね、夫婦で？

珂〈張秀珂〉は上海に来たのね<sup>60)</sup>、結局こんなにすぐ来ることになるなんて、本当にびっくりだわ。しばらくそこに住まわせましょう。私だって決めてあげられないから、彼からの手紙が来てからのことにしましょう。

私はほら吹きじゃないわよ、本当に聞きに行ったんだから。それに理解できたのよ。妬まなくて良いわ、教えてあげる、通訳がいたの<sup>61)</sup>。

あなたのギターのいきさつは、まるで小説みたいね。修理に持って行ったのに、逆にもっと壊してしまうなんて<sup>62)</sup>。

でも小説を翻訳するあのことなら、あなたに選んで貰うしかないわ。手許に本はないし、どれが好きでどれが嫌いかも忘れてしまった。

私は『誓』のあの部分が良いと思うけれど、やっぱり最後のあの部分かしら？そうでなければ『手』か『家族以外の人』ね！作品は少ないけれど、選ぶのは難しいわね。任せるわ。自伝の500～600字は、2～3日の内に書き上がります<sup>63)</sup>。

清<sup>64)</sup>がこう言っていたわ。あなたが近頃お酒を飲むのは私の煙草に仕返するためだって<sup>65)</sup>。そんな駄目よ。あなたは1枚の草の葉と勝負なんてできない。本当よ、私は1枚の草の葉みたいに孤独なの。私たちが上海に来たばかりの頃の、あの感じ、あなたは忘れてしまったけれど、私はまたはじめから味わっています。

御元気で。

栄子 12月5日

第三十二信（1936年12月15日）

三郎：

私は迷ったことはありません。帰ろうという気持ちは一向にないわ<sup>66)</sup>。あれはたまたま冗談で言っただけよ。一度本当に帰りたいと思うようになったのは外的要因で、自発的なことではありません。

多分あなたはまた忘れたのね。夜また何か食べたでしょう。夜、外国のバーでお酒を飲んで、その時につまみを何か食べた、そうでしょう？食べてはいけません。夜何か食べるのはあなたにはよくないわ。

あなたの蒲団はわたしのよりまだ薄い、使うべきでないことは言うまでもありません。こっこの夜だって冷えるのよ。自分で3円で綿を1枚分買って、蒲団を〈袁〉淑奇のところに持って行き綿を足してもらいなさい。もし手許に余裕があったら、外国の店に行って蒲団を1枚買いなさい、人に面倒をかけないために<sup>67)</sup>。

私があなたに言うこと、いつもその通りにしてくれない。小さなことでも、あなたはいつも私

を安心させてはくれないわ。

体調はあまり良くありません。自分でも何が良くないのか分からない。沈女士<sup>68)</sup>が最近会ったとたん、私の顔が浮腫んで青白いと言いました。私もそう思ったり、それほどでもないと思ったり。だってずっとこんな風、珍しいことではないから<sup>69)</sup>。

一昨日また酷い頭痛がありました。私にはどれほどの深刻な打撃にもならないのですが（痛みに慣れてしまったためです）、でもその時の実際の苦しみは何と言っても切実なものです。考えてみれば頭痛を抱えてもう4～5年になります。この4～5年の間に頭痛薬をどれほど飲んだとか。辛くなってくると、早く治療して欲しいと思うけれど、それが取まってしまうと、いつもそんな必要がなくなる。頭痛で死ぬことはないのだから。今はお金があるから、こんな小さな病気でさえ大騒ぎして。ご飯を食べるお金がようやく問題にならなくなったからじゃないかしら。だからやっぱり帰らない。

皆は私の体調が良くないと言うけれど、本当はとても元気です。もしも誰かとすり替わって、その人に4～5年間ひっきりなしの頭痛を与えたとしても、その人の体調が良いかどうかは分からないと思うわ。だから私は自分が健康だと信じている。

周先生の絵、見たくもないわ<sup>70)</sup>。見たら辛すぎる。海嬰はお父さんのことを思っているかしら？

ここは、私にとって少しも名残惜しくありません。もし戻ったら、また来たいとは思わない。だからいっそのことここに沢山いた方が良いの<sup>71)</sup>。

今はいろいろな言葉、ほとんどわかります。だから部屋を探したり、大家さんと交渉するなんてこともほとんど大丈夫<sup>72)</sup>。多分東亜学校の授業がとても多かったせいね。先生は教室ではほとんど日本語で話されるから。初めて日本に来た時のことを今思い返すと、華〈許粵華〉<sup>73)</sup>が帰ってしまったからは本当に大変だったわ。ほとんど我慢できないくらいだった。

珂（張秀珂）は、家から手紙が来た以上、ちゃんと考えてやりましょう<sup>74)</sup>。損得を話してやって、後はもちろん彼自身に任せるべきだわ。私はこんなに離れているから、彼の様子については、ちゃんと理解できない。この前のあなたの手紙で意見を聞かれたけれど、その時は私もどうして彼が上海に来たのか分からなかった。彼が既に手紙を寄越していたのは、大方私たちを探すためでしょう。もちろん彼には彼の苦しみがあるけれど、私たちを捜し当てれば、彼がまた新しい苦しみを抱えることになるのは分かるんじゃない？彼が私に寄越した手紙では「僕は流浪することを憂えはしない」と言うし、また将来はやるべきことを見つけて生活を維持するとも言う。私には分かっています。上海で仕事を探そうとしてそっち〈上海〉に行ったのよ。私はいつも彼の生活が問題になるのを心配しています。若いし、精神的にもナイーブだし、もし頑張ってもすぐだめになったら、それからの力を失ってしまうわ。家と関係が切れていないのだから、北平に行って勉強すればいいと思う。もう一度ここに来たくないならね<sup>75)</sup>。

ここ〈日本〉は、短い間暮らしてみるには良いです。日本語を勉強して。長くなると我慢できない。もし留学するなら、私もここは反対です。日本は私たちの中国よりもっと病んでいるし、干上がっています。ここには健康な魂はありません。生活なんかじゃない。中国人の魂は全世界中で言うなら病んだ魂ですが、日本に来てみると、日本は私たちよりもっと病んでいます。中国人である以上は、それこそ日本に留学すべきではありません。この人々の生活には、僅かの自



由もない。朝から晩まで、僅かな音すら聞こえてこない。あらゆる住宅がみな空っぽで、誰も住んでいないかのようです。朝から晩まで歌声も聞こえないし、泣き声も、笑い声も、何もない。夜、窓から外を見ると、家はどれも真っ暗、灯りも窓の板〈雨戸〉に遮られてしまう。日本の人々の生活は本当に憐れです。仕事をするだけ、仕事は死にものぐるいでやります。だから彼らの生活は全く陰鬱です。中国人には民族的病があって、私たちはそれを正そうと思っているのだけれど、まだまだです。またここに来て日本人を見習っても、病の上に病を重ねるようなものです。日本に学ぶべきことがないと言っているのではありません。劣っているのは彼らの不健康なところだけですが、それはまたまさに私たちの不健康なところでもあります。健康のためには、いいところも捨て置くしかありません。

話は変わりますが、来年の春、あなたはまた自分の行きたいところに行つてのんびりしたら良いわ。私はここでのんびりするだけ。

土曜日の夜（つまり12日）、私は沈女士のところに泊まりました。朝まだ暗いうち、新聞を見たら、こんな大事件で2人共1日中落ち着きませんでした<sup>76)</sup>。上海は結局どんな具合ですか。あなたの手紙を待つしかありません。

良いお年を。

榮子 12月15日

「日本東京麹町区」とこう書けば良いのです。点は要りません。

### 第三十三信（1936年12月18日）<sup>77)</sup>

三郎：

今日の東京は風が強くて変に温かいです。

新年の雰囲気満ちあふれていて、街を歩いていると却って気分が悪くなる。みんな楽しそうですが、私とは関係がない。いわゆる面白味って、自分がその中にいなければ。もし自分がいいのなら、それは全てどうでも良いことだわ。

今日は手紙が来るはずだと思っていたのだけれど、まだ来ません。がっかりがっかり。

学校はあと4日だけです。終わったら10日休み。その後はまた考えます。よそに先生を探るか、まだあの学校で勉強を続けるか<sup>78)</sup>。

奇〈袁淑奇〉や珂〈張秀珂〉に会いたくてたまらない。でもそのために帰るわけにはいかないのだから、仕方ないわ。

1月に出版するはずだった出版物<sup>79)</sup>は、今回は駄目なんじゃないの？あなたたちは何ばたばたしているの？遠く離れていると、しょっちゅうあなたたちの方を気にしていなければならぬ。本当に嫌だわ。いっそこっちからも聞かないし、言ってきたり聞かないことにするわ。

三代<sup>80)</sup>は今回本当に引っ越ししたのね。冗談が本当になってしまった。

新年になるけれど、ほかに要るものではありません。ただ小説を何冊か送って。書留でなくていいわ、なくなりほしないから。『復活』とか『騎馬而去的婦人』とか<sup>81)</sup>、そのほかには思いつかない。結局この間、何冊も読み流してしまうんじゃないかしら。残念なことに、読みたいと思っ

た時には本がない。本を送る時に何か不都合があるかどうか分からないのだけれど。もし不都合があるなら、無理は言いません。  
御元気で。

栄子 12月18日夜

3匹の子猫は奇〈袁淑奇〉にあげたもの。  
奇の住所、「巴里」かしら、「何里」かしら。彼女の字がはっきりしないの。この前の手紙、彼女は受け取ったのかしら。私は「巴里」に送りました。

### 第三十四信（1936年12月末日）

軍：

爾なんじまた 亦人なり也、吾も亦人われ也、爾は健康、我は多病、常に健牛と病驢おこの感興り、故に毎つねに暗中慚愧ひそかにす<sup>82)</sup>。

現在頭亦痛まず、脚も亦痛まず、心配ご無用に。

用件のみ。

新年の慶びを申し上げます。

瑩 12月末日

### 第三十五信（1937年1月4日）

軍：

新年は報告するような楽しいことは何ありません。ただ、隣が火事になりました。でも私は別に驚きませんでした。沈女士のところに泊まっていたから<sup>83)</sup>。

2日にあなたの手紙1通受け取りました。それから珂〈張秀珂〉の手紙も。あなたを誉めていました。添付します。

御元気で。

栄子 1月4日

### 付：張秀珂が蕭軍の印象について、蕭紅宛に書いた手紙<sup>84)</sup>

喜んで姉さんに言いたいことがあります。軍には初めて会いましたが、写真や本で彼の豪快なところや正義感にあふれたところを見ていました。でもここ数日実際に一緒にいると、真実が証明されるし、実感もできます<sup>85)</sup>。昨日僕たちは一緒に洋食を食べました。ほんの少しお酒も飲んで、店を出た時、彼の顔は真っ赤で、あることで興奮しているようでした。僕には分かりませんでしたが、彼のことは分かりました。彼のことが好きだし、愛すべき人だと思います！

王德芬「蕭軍簡歴年表」によれば、1月9日午後1時、蕭紅は横浜から「秩父丸」に乗って日

本を離れ、13日の午後上海に到着したという。

蕭紅が急遽帰国を決めたのは、蕭軍の女性問題があったと言われている。『注釈録』には東京からの35通の後に、蕭紅が北京から蕭軍に送った手紙7通（1937年4月25日～5月15日）が収録されているが、その中の5月4日付の書簡に対する注の中に次のような一文がある。

愛情の面で一度、彼女に対して「不誠実」だったことがあった——互いに愛し合っていた間、彼女にはそのような不誠実な行為はなかったということを私は認める——これは事実だ。それは彼女が日本に行っている間、ある偶然の出会いによって、ある人と短期間感情のもつれ——いわゆる「恋愛」——を起こしたことがある。しかし私も相手も、道義上2人が一緒になる可能性がないことはよくわかっていた。このような「結果のない恋愛」を収束させるために、我々2人は蕭紅を日本からすぐに呼び戻すことを決めた。このような「収束」が互いに苦しいものだったことは言うまでもない。

「東京から——蕭紅書簡（上） 翻訳と注釈」注7でも言及したように、この時の蕭軍の相手の女性は当時黄源の妻であった許粵華であるとする説が流布しているが、根拠は明らかでない。ただ、許粵華は抗日戦の中で黄源と別れており、また黄源の息子の妻である洪蓉芳の「黄源身後三位不平凡的女性」は許粵華に一切言及していない。

東京で蕭紅がどれほど充実した時を送っていたのかはわからないが、いずれにせよ志半ばにして帰国を余儀なくされた、その理由が夫の女性関係であり、しかもその相手が自身の親しい友人であり、また親しい友人の妻でもあった女性であるとしたなら、蕭紅の心中はいかばかりか、察するにあまりある。

- 1) 上注6参照（「上」は「東京から——蕭紅書簡（上） 翻訳と注釈」を指す）。
- 2) 第二十三信（10.20）で、月末に送金して欲しいと依頼している。
- 3) 第二十三信（10.20）と「海外の悲しみ」（10.24）（上注106参照）を指すと思われるが、蕭軍『蕭紅書簡輯存注釈録』（1981.1、黒龍江人民出版社、以下『注釈録』）にはこの間にもう1通21日付の第二十四信がある。
- 4) 蕭軍は蕭紅が日本に向かった後にそれまで住んでいた部屋を引き払い、友人を頼って青島に行く。10月12日に青島から戻った彼は、上海呂班路256弄の白ロシア人経営のアパートを借りたらしい（王徳芬「蕭軍簡歴年表」：『蕭軍紀念集』1990、春風文芸出版社）。上注76参照。
- 5) 蕭紅は1936年7月20日頃に単身東京に来ている。拙訳「東京から——蕭紅書簡（上） 翻訳と注釈」参照。

2014年に香港から『蕭紅書簡』と題して『注釈録』の新版が出版され、若干の新資料が付されている。中に補遺として、東京から出された蕭紅の7月20日付の手紙があるので、それをここに訳出しておく。

三郎：

無事に着きました。これから食事に出ますので、ほんの少し書いておきます。

彼女たちはとても喜んでいます。

文化大革命によって蕭軍は多くの原稿や資料を失った。その中で蕭紅の書簡が奇跡的に難を免れたことは既に「東京から——蕭紅書簡（上） 翻訳と注釈」で述べた。上記の書簡は『注釈録』の出版には間に合わなかったのだと、編者の蕭耘・王建中（蕭軍の娘夫婦）は述べている。

編者はこの書簡は恐らく蕭紅の乗った船が到着した後に急いで書いたものであろうと推測している。また「彼女たち」は黄源夫人の許粵華とその友人であると解説している。

- 6) 「奇」は哈爾濱時代からの友人、淑奇（袁時潔）。「明」はその夫の黄之明。上注35参照。
- 7) 上海の旧式の住宅に見られる部屋で、家の裏側（北側）の二階部分に位置し、台所とベランダに挟まれて、天井も低く、暗い。
- 8) 上注14参照。本稿に収めた書簡は、前述したとおりすべて魯迅の死後に書かれたもので、随所に師を失った悲しみがにじんでいる。
- 9) ここで言っている原稿が何を指すのかは不明。現在分かっている中でこの時期に書かれた可能性のある作品は何れも1万字に満たない短いものばかりである。
- 10) 第三十二信（12.15）では、授業はほとんどが日本語なので、だいぶわかるようになったと自信を覗かせている。
- 11) 上注7参照。
- 12) 『注釈録』で11月2日付の「第二十六信」とされている書簡は、書かれている内容から見て12月2日付の誤りと思われるので、本稿では11月24日付の第三十信の後ろに置く。詳細は注40を参照されたい。
- 13) 蕭軍の自伝的長編。1936年に『作家』に連載され、1957年に北京作家出版社より2巻本として出版される。その後『過去の年代』と改題（27：『注釈録』収録の第二十七信に対する蕭軍の注であることを示す。以下同じ）。上注91参照。
- 14) 蕭軍の作品集『十月十五日』（1937）所収。

第二十七信の注に蕭軍は次のように書いている。「この小説は一人称によって、1人の知識青年を描いている。彼は正規の軍事訓練を受けた経験があり、東北盤石に行って、中国共産党員楊靖宇（1905～40）の率いる抗日『人民革命軍』の武装闘争に加わることを日々夢見ていた。当時哈爾濱にいた地下党員の友人たちも、彼に行けと言ひ、激しく非難し、揶揄しさえした……。しかし不幸なことにこの時彼は1人の文学の才能豊かな女性と巡り会ってしまったのだ。困難な環境のただ中にいる彼女を、彼は助けなければならなかったし、また一緒に暮らさなければ彼女を救うことはできなかった。もし途中で彼女から離れでもしたら、そういう具体的な状況の下では、どの方面から見ても再び彼女を『窮地』に追い込むことになってしまう。だから彼は矛盾を抱え、苦しみ……。しかし最後にはやはり自分の愛情に忠実に、彼の愛する人に忠実に、彼女の側に留まることを決めた。彼女が健康を取り戻したら改めて考えることにしよう……。この小説の素材は、ほとんどの部分が我々自身の生活の中で実際に遭遇したことから取られているし、登場人物の何人かは実在している。……これは文芸作品とは言えず、我々の生活の『実録』にすぎないのかもしれない。だから彼女は、私がまだよく覚えている、細かい所は彼女自身も『ほんやり』している、と言ったのだ。彼女は女主人公の芹——彼女自身の姿——について、幽霊のように恐ろしい、自分自身でもぞつとすると。だから彼女はこの手紙で、『私たちが喧嘩をするのは皆そんな原因——つまり1人のためを考えるのか、たくさんの人のためを考えるのか、というところにあるんじゃないかと思います……。』と言ったのだ。最後に彼女はこう言っている。『これからはもうあんな風にあなたの邪魔はしないわ。あなたにはあなたの自由があるのだから』。／この手紙から、我々が1938年に永遠に別れる

ことになった歴史的な原因が、2人が一緒に暮らすようになった当初から既に存在していたことが分かる。（中略）我々は1938年に西安で永遠の別れを迎えたが、それより以前、山西省臨汾が我々の別離の時だったとも言える。——私は臨汾に残り、彼女は西安に行った」。

蕭紅は帰国後、戦火を避けて蕭軍と共に武昌へ行き、更に翌1938年1月、臨汾の民族革命大学に招かれるが、その後蕭軍は五台山の抗日遊撃隊に参加するため、単身臨汾を離れる（王德芬「蕭軍簡歴年表」）。蕭紅は後に結婚することになる端木蕻良と共に西安に行き、西安で蕭軍と再会した時に自分から別れを告げたと言われる。蕭軍の「私は臨汾に残り、彼女は西安に行った」という一文は、上記年表の記述と矛盾する。

15) 第二十五信及び注6参照。

16) 第二十五信及び注4参照。

17) 注14参照。

18) 手袋については3日後の第二十八信（11.9）で、2組送ると言っている。

19) 蕭軍は、いくつかの刊行物が彼を通じて蕭紅に、魯迅を追憶する文章を書くよう依頼してきた、と言っている（28）。

20) 「許広平先生は私に会う度にいつも蕭紅の様子を尋ねられ、そのことを彼女に伝えた」（28）。「（許）先生は蕭紅と仲が良く、よく2人で『密談』をしていた（魯迅先生や私が聞いたり質問したりすることは許されなかった）。恐らく許先生が自分の人生の経験などを全部蕭紅に話していたのだろう。だから彼女たちはお互い比較的理解し合っていたのだ」（26）。

許広平には蕭紅との交友について、「憶蕭紅」（『大公報・文芸』1945.11.28）、「追憶蕭紅」（『文芸復興』1-6、1946.7.1）の2篇の文章がある。また蕭紅「回憶魯迅先生」（『中蘇文化』4-3、1939.10.1：拙訳「魯迅先生の思い出」2015.3～2016.3、『日本女子大学文学部紀要』64～65所収）からもその交友の様子を見ることができる。

21) この「刊行物」について蕭軍は、記憶がはっきりしないが、『報告』ではないか、と言う。「費慎祥という、確か北新書局の店員だった人がいた。魯迅先生をたいへんに尊敬し、真心を以て接していたため、彼が『北新』を離れ、生活に窮していた時、魯迅先生は自分の公開出版できない本——例えば『准風月談』など——を彼に出版させることにした。そのため、彼は自ら『地下』出版社を創設し、一部の左翼作家の、公開出版できない本を専門に出版することになった。私は魯迅先生の所で彼と知り合った。魯迅先生が亡くなられた時、彼と私は共に『葬儀事務室』におり、始終顔を合わせたので、いっそう親しくなった。彼がどうしても私に彼の『出版社』で刊行物の編集をしてくれと言って聞かないので、引き受けざるを得なくなり、『報告』と名づけた刊行物を編輯することになった。二期出版したが、経済的なやりくりが続かず、停刊してしまった」（28）。

『魯迅全集』（1984.11、学習研究社）第19巻の「人名注釈・索引（中国）」には、費慎祥について次のように書かれている。

費慎祥（1913－1951ころ）（中略）江蘇省無錫の人。1932年当時は上海の北進書局の職員。1933年、魯迅の援助のもと野草書屋を創設。翌年さらに聯華書局を創設、魯迅の翻訳、著作を出版。

『魯迅先生紀念集』（魯迅先生紀念委員會編、1937初版、1979.12復印）によれば、魯迅の死後、葬儀委員會（治喪委員會）のほかには葬儀事務室（治喪辦事處）が組織され、来賓の招待とか祭壇のしつらえ、新聞記者への対応といった細かな仕事を担当したという。そのメンバーの中に蕭軍と費慎祥の名前がある。

劉増人等『中国現代文学期刊史論』（2005.11、新華出版社）によれば、『報告』の創刊は1937年2月10日である。同書によれば編集は黄碩、発行人は費慎祥、報告半月刊社の出版で、報告文学、雑文、ルポなどを掲載したが1期で停刊している。創刊号に1937年1月10日の日付のある蕭紅の散文「永久的憧憬與追求」が掲載されている。

22) 胡風（1904／02～85）については注26参照。

- 23) この「短編」が何を指すのかは不明だが、この一文の前に「刊行物」についての問い合わせがあるところから推すと、「永久的憧憬與追求」を指しているのかもしれない。
- 24) 蕭軍はこの手紙は日本から送った中で最も長いものではないかとし、そして、自分は彼女のような考え方はしないが、理解はできるとした上で、次のように言う。「音楽に例えるなら、彼女はバイオリンで、ショパンの抒情的で哀愁に満ちた、人をどうしようもない、抵抗する術のないような気持ちにさせる、髪の毛のように細いセレナーデを奏でているようだ。だが私は、ピアノか、または管弦楽器でソナタかシンフォニーを演奏することしかできない。これは恐らく性別や性格の違いとも関係があるだろう。／ピアノとバイオリンで合奏することができるなら、それはもちろん素晴らしい。だがそうできないなら、それぞれが自分の特徴や特性に合った楽曲を奏でるだけだ。音量、音質、音色……いずれも全部違う」(29)。
- 25) 1937年に改造社から『大魯迅全集』全7巻が出版されている。中国では1938年6月に魯迅先生記念委員会により全17巻の『魯迅全集』が出版された。
- 26) 聶紺弩(1903～86) 夫妻とは1934年12月19日に胡風夫妻の最初の子どもの誕生祝いという名目で魯迅が開いた梁園豫菜館での宴会で会っており、聶には蕭紅との思い出を綴った「在西安」(1946.1.20)がある。連絡の行き違いで胡風は魯迅の宴席に現れなかったが、彼が魯迅に依頼されて蕭紅の「『生死場』読後感」を書いて以後、親密な交際が続いた。黄源については上注7参照。
- 27) 蕭紅の、哈爾濱時代の生活を反映した散文を集めたもの。1936年8月出版。
- 28) 白朗(1912～94)は哈爾濱時代からの親しい友人。1935年、同じく作家である夫の羅烽(1909～91)と共に東北を脱出し、蕭軍、蕭紅を頼って上海に来ている。蕭軍によれば、白朗は上海に来た後男の子を産んだが、死んでしまったという。羅烽、白朗については平石「星星の火、広野を焼くべし」(『大正大学研究論叢』第13号、2007.3)、『『牽牛房』をめぐって——蕭紅『商市街』より』(『中国東北文化研究の広場』第1号、2007.9、「満州国」文学研究会)、「白朗の初期作品について——出て行く若者たち」(『立命館文学』2010.3)、「作家戦地訪問団について」(『鴨台史学』第11号、大正大学史学会、2011.3)、「白朗と作家戦地訪問団の人々」(『川勝守・賢亮博士古希記念 東方学論集』汲古書院、2013.3)などがある。
- 29) 第二十三信(10.20)に、下宿の部屋に関する描写があり、部屋の小さな丸テーブルの上に赤色の酒が1本と対になった金の杯があると書かれている。
- 30) 蕭紅はたびたび大家さんとの関係はとてもいいと言っている。上注38参照。  
しかし魯迅の死をめぐって書かれた「在東京」(1937.8:『七月』1-1、1937.10.16／拙訳「蕭紅 東京にて」:『中国現代散文傑作選1920→1940』2016.2、勉誠出版社)では、押さえられない自身の悲しみを大家さんにもぶつけている。
- 31) 蕭紅は第七信(8.22)で、5歳くらいの大家さんの子供と仲良くなった、と書いている。
- 32) 11月3日午前5時45分に宮城県沖でマグニチュード7.4の地震(金華山沖地震)が起きている。震源地付近の建物の全壊被害が3件報告されていることから、東京もかなり揺れたと想定される(内閣府東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会第1回会合「中央防災会議専門調査会における想定地震」平成23年5月28日)。また宇佐美龍夫『新編日本被害地震総覧』(1996、東京大学出版会)ではマグニチュードは7.5とし、次のように記録している。「宮城県で傷4、全壊非住家3、半壊住家2、同非住家2、道路欠損35カ所、計225間(約410m)の被害があった。また、仙台大崎八幡の灯籠60個のうち3つが倒れた。その他、宮城・福島両県の沿岸で、瓦の落下、土蔵壁の剥落、道路の亀裂などがところどころに見られた。小津波あり。八戸で全振幅67cm、女川で波の高さ約3尺(約0.9m)という」。
- 33) 蕭紅が何時帰国を決意したのかは不明だが、この表現から、蕭紅は1937年1月末までは日本にいた心づもりだったことがわかる。第三十二信(12.15)、第三十三信(12.18)からは帰国の意思を読み取ることはできない。注66参照。

- 34) スケートは19世紀後半に日本に伝わり、大正時代になっていくつかの団体が成立するまでになっている。昭和に入ると日本スケート連盟が創設され（1929年、昭和4年）、国際試合に選手を派遣するようになり、よく知られたスポーツとなっていったようだ（『現代体育スポーツ体系 第16巻 スキー・スケート・そり競技』1984、講談社ほか）。蕭紅がいた昭和11年は、そのはしりの頃と言っている。当時都内にもスケート場はあったはずで、例えば昭和8（1933）年11月11日の『朝日新聞』朝刊は「また一つ・東洋一」と冠して芝浦にアイススケート場が開設されたことを報じている。
- 35) 原文は「火炉」。
- 36) 2014年、許安華により蕭紅の生涯を描いた映画が制作されて評判となり、中国では何回目かの蕭紅ブームが起こった。その題名「黄金時代」はここから取られている。
- 37) 本名志伊、字は莘農。1904年生まれ。浙江省余杭の人。翻訳家、劇作家。英文『天下』月刊の編集や明星映画会社シナリオ委員会副主任の経験がある。1932年冬、魯迅の作品の翻訳をするエドガー・スノーを手伝ったことで魯迅と知り合う。1933年9月、スノーの招きで北平に行き、その後、翻訳上の問題や中国の木版画をフランスで展覧する件などで、しばしば魯迅と通信。1935年秋、上海に帰り、その後度々魯迅を訪問。『訳文叢書』（魯迅・黄源編集）にバーナード・ショウの戯曲「魔法使いの弟子」を翻訳する（16巻本『魯迅全集』『魯迅書簡』1933.3.5、原注及び岩波『魯迅全集』『人物注釈・索引』）。姚克は当時上海明星影片公司の脚本家だった（30）。
- 38) ロバや牛の皮を使って人形<sup>ひとがた</sup>などを作り、影絵で見せる中国の伝統芸能。
- 39) 蕭軍によれば、哈爾濱にいた時にたまたま試作した映画のシナリオ。貧しい若い夫婦に子どもが生まれたが、とても育てていけない。話し合った結果川に捨てようとしたが、ちょうど捨てようとしたその時警察に見つかり、子どもを殺そうとした罪で逮捕され、罪に問われる。その後、子どもはどうなったか分からない、というストーリーであるという。蕭紅の初期の作品に同名の「棄児」（1933.4.18、初出は『大同報・大同倶楽部』1933.5.6～5.17）がある。ストーリーは異なるが、蕭紅は実際に最初の子供を人手に渡しており、現実の体験がこれらの作品の構想につながっていることは確かである。上注25参照。
- 「私は彼女の意見を聞かず、姚克に会いにも行かなかった」（30）。
- 40) この年、郁達夫（1896～1945）は外務省の「東方文化事業」の助成により来日、講演を行っている。李麗君「日本外務省所蔵資料から解く郁達夫の訪日」（九州大学大学院言語文化研究院『言語文化論究』第33号、2014）の詳細な検証によれば、郁達夫が東京に到着したのは11月13日、東京では2回講演を行っており、1回目が11月26日、2回目が12月2日である。本来は何回か講演を行う予定だったが、2回目の講演が「反日講演」であったとの理由で、その後は中止された。これらの講演会については次のような記録がある（カタカナ部分はひらがなに、数字は算用数字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに書き改め、句読点を補った）。

1、11月26日正午より麹町区3年町1、霞山会館に於ける東亜同文会主催の招待午餐会に出席し、席上「支那の現状に就いて」と題し、出席者、本多熊太郎、太田宇之助、五百木良三、大竹貫一、高橋雄豺、八画三郎、古島一雄、有賀長文、赤池濃、木村鋭市、菊池武夫等計75名に対し、（1）支那に於ける土の階級の衰微、没落、（2）軍閥の跋扈、（3）農村疲弊の状態、（4）支那に於ける知識階級、（5）日支の互惠平等的提携の必要等に就き、大要別記の如き講演を為せり。

2、12月5日午後2時より神田区西神田2の2、日華学会3階講堂に於ける中国文学研究会（事務所、芝区白金今里町89番地）主催の講演会に臨み、出席者竹内好外13名に対し「中国の詩の変遷」と題し講演予定なりし處、対号既報の如く、本月2日午後4時より右日華学会楼上に於ける中華留日学生学術講演会の席上講演せる言動中、反日煽動的なるものありたるに鑑み、同

会主事高橋君平より好意の忠告を受けし為、任意、右講演を中止せり。

3、12月13日午後2時より右日華学会に於ける中華留日明治大学校友会主催の第2次学術講演会に出席し、「文学的時代性」と題し講演を行う予定なり。

(警視総監石田馨「文化視察と称する中国左翼作家郁達夫の言動に関する件」：外秘第3061号、昭和11年12月11日。李2014より引用、下線筆者)

蕭紅が出席した郁達夫の講演会は、彼女がいくら上海で作家としての名を高めていたとはいえ、手紙で見る限り日本において文芸関係者とは全く接触がなかったと思われることから、霞山会館で行われた東亜同文会主催の招待午餐会に出席する可能性はなかっただろう。とすれば彼女が出席した講演会は12月2日の、中華留日学生学術講演会で、郁達夫が「反日講演」をしたと目された会であったと思われる。注48参照。

- 41) 『橋』は蕭紅の短編集で、1936年11月に上海文化生活出版社から文学叢刊の1冊として出版された。収録作品は「橋」、「小六」、「手」など13篇。『緑葉的故事』は蕭軍の作品集で、同じく文学叢刊の1冊として1936年12月に出版された。「緑葉的故事」、「大連丸上」など10篇の散文と31篇の詩が収録されている。
- 42) 1935年7月、東京の文学案内社より『文学案内』と題した、プロレタリア文学を目指した月刊誌が出版されている。第1号から3号までは無料で配布され、第4号(十月飛躍号)の巻頭には、本号が実質上の創刊号であると書かれており、「『文学案内』の方針について」という一文がある。

「文学案内」は勤労者の中から作家を育てるように努力するのが目的か、それとも勤労大衆のために善きよみ物を乗せるのが目的か、ということが本紙の顧問青野季吉氏と細田民樹氏とが、座談会の席上で、質問された。そして両氏とも飽迄後者が主で、前者は従でなければならないと説かれた。勿論結果として、作家をそう沢山育てようたって育つものではない。作家は特殊の才能だから。随って「文学案内」は読者全体のために勤労者の立場に立つ善き文学、善きよみ物を中心的にのせ、その影響の中から勤労階級の作家が目醒めてくるよう、懇切な「作り方」をも併せてのせて行く——という方針である。この二つを同時にやって行くことが、両方の目的を同時に達することになると信じている次第である。(旧仮名遣いと旧漢字は改めてある：筆者)

ここで言う「座談会」は第4号に掲載されており、出席者は青野、細田のほか藤森成吉、舟橋聖一、島木健作、徳永直、大宅壮一、杉山平助、これに編集責任者の貴司山治と丸山義二が加わっている。

内容から見て、蕭紅が見た『文学案内』はこの月刊誌であろうと思われるが、東京で、中国、日本を問わず、文学関係者とあまり繋がりがなかったように見える蕭紅が、どこからこのような情報を得た、あるいは得ていたのだろうか。

- 43) 魯迅の家にいた2人の年とった女中のことであろう。平石「魯迅先生の思い出(上)——翻訳と注釈——」(『日本女子大学文学部紀要』第64号、2015.3) 参照。
- 44) 第五信(8.17)で蕭紅は蕭軍に柔らかい枕を買うようにと既に指示しているが、この手紙を見ると、彼は言うことを聞かなかったようだ。上注22参照。
- 45) 蕭紅は絵画に関心があるばかりでなく、その方面の才能もあった。『注釈録』には彼女が東京の下宿を描いたスケッチが残っており、また『生死場』(1935.12)や『馬伯楽』(1941.1)の表紙も彼女がデザインしたものとされている。上注20参照。
- 46) 具体的にどの文章を指すのかは不明。「寂寂寞寞」は、魯迅が亡くなった後でもあり、師を失った悲しみ、寂しさを表現すべきだ、という意味か。



- 47) 蕭軍は魯迅が埋葬された後、雨の日も風の日も毎週墓参りに行き、花を供えて自身の哀悼の意を示したという（王德芬「蕭軍簡歴年表」）。

「刊行物を焼く」ということについて、蕭軍は次のように書いている。「私は確か魯迅先生が亡くなられた1ヶ月後、万国公墓の先生の墓前で、出版されたばかりの『作家』、『訳文』、『中流』を1冊ずつ焼いた。これが張春橋や馬蜂（中共中央の文書に挙げられている国民党特務組織『華蒂社』の馬吉峰）に見られてしまい、彼らは新聞で魯迅先生を侮蔑し、私を揶揄した。私は彼らの居所に押しかけ、夜徐家匯で会う約束をし、一戦交えた。私が馬吉峰にひとしきりお見舞いしてやったら、それからは私を罵らなくなった」（30）。蕭軍が焼いた3冊はいずれも魯迅の追悼文を掲載した号だと思われる。

張春橋は後に文化大革命の中で「四人組」と称された首謀者の1人となる人物である。この事件以前にも、張は狄克の筆名で、蕭軍の『八月の村』を真実ではないと批判したことがあり、これに対して魯迅はすぐに「三月の租界」（1936.5、『且介亭雜文末編』所収）を発表し、狄克を批判した。狄克が張春橋であることは、一般には長く伏せられていたものの、当時関係者の間では知られていたらしい。

- 48) 鈴木正夫「『蕭紅書簡輯存注釈録』と『郁達夫詞抄』の編輯ミス」（『中国文芸研究会会報』第40号、1983.5.15）及び李麗君の詳細な検証（注40参照）によれば、郁達夫が東京に到着したのは11月13日である。11月24日付の第三十信に講演を聴きに行く、とあることから、鈴木の指摘の通り、この手紙の日付は12月2日の誤りではないかと考えられ、またそれは李麗君の調査結果とも符合する。従って本稿では第二十六信の正しい日付は「12月2日」とであるとする。

- 49) 手紙本文の「于」の後に「(郁)」が書き加えられているが、蕭軍が書き入れたものだろうか。「于」と「郁」は中国語では同じ発音。

郁達夫の講演については、注40、注48参照。

- 50) 蕭紅は9月14日開講の午後クラスに在籍していたらしい。上注49参照。

- 51) 次の第三十一信（12.5）で外国語への翻訳について言及しているが、具体的にどの作品を指すのかは不明である。注63参照。

- 52) 張秀珂は蕭紅の同腹の弟で、北京から手紙を寄越し、上海に来たいと言ってきた（26）と言うが、第三十一信（12.5）を見ると、この時には既に上海に来ていたようだ。更に蕭紅の実家からも手紙が来ていたことがうかがわれる（第三十二信：12.15）。注85、上注16参照。

- 53) 牽牛房は1930年代初の哈爾濱における左翼文芸運動の中心となったところ。詳細は上注35参照。

- 54) 注20参照。

- 55) 「子ども」は魯迅と許広平の間に生まれた一人息子、周海嬰（1929～2011）。

- 56) 「魯迅先生が亡くなられてから許先生はもう『大陸新村』のもとの家に住みたくないと言われた。——これはよく分かる。その場所を見ると悲しみがわいてしまうのだ——私は先生のためにフランス租界の『霞飛坊』の3階建ての建物を見つけた。当時私もそこに住んでいたので、先生は引っ越して来られた。私たちは同じ敷地の中に住み、建物は幾つも離れていなかった。毎日1回から数回、顔を合わせた。当時私は先生の代理で印刷所に『且介亭雜文』1、2、3集のゲラを届け、また『魯迅紀念集』の編集などの仕事をしていたから、始終顔を合わせなければならなかったのだ」（26）。

- 57) 12月2日の誤り。注12、注40参照。

- 58) 「無茶な真似」について心当たりはない、と蕭軍は言う（31）。

- 59) 哈爾濱時代の友人（31）。

- 60) 第二十六信（12.2）に、弟の張秀珂が上海に来ることについての言及がある。注52参照。

- 61) 第三十信（11.24）で言っている日本人の講演会のことだろうか。しかし日本での日本人の講演会に中国語の通訳がいるのもおかしい話である。

- 62) 「私は中古屋で古い7弦の『ギター』を買ったのだが、胴のところが少しへこんでいたので、修理屋

に持って行って直してもらおうと思った。その日、私はギターを持って電車で飛び乗ろうとしたのだが、革靴が滑って『腹ばい』になってしまった。左手がちょうどギターの上になり、胴全体が割れてしまった……」(31)。

- 63) 蕭軍は、恐らく『生死場』中の何章かが外国語に翻訳されるということになり、どの章がいいかを尋ねたのではないかとやっている(31)。しかし『生死場』全17章の中に「誓(原文は発誓)」と題された章はない。内容から推せば、農民たちが「俺は中国人だ! 亡国奴じゃない!」と叫んで立ち上がる第13章「你要死滅嗎?」のことだろうか。

「自伝」は「永久的憧憬與追求」(1936.12.12)を指すと思われる。これはもともとエドガー・スノーが編輯する“Living China”短編小説集のために自伝として書かれたが、結局蕭紅の作品は掲載されないこととなり、自伝もそこには掲載されなかった。「永久的憧憬與追求」が『報告』に掲載されたことは既に述べた(注21参照)。

- 64) 河清、即ち黄源のことか。

- 65) 「私は当時煙草は吸わなかった——今は吸っている——だから煙草を吸う人に対して『意見』があった。特に女性の喫煙に対して。私はこう言ったのだ。女性が煙草を吸っているのを見ると、墮落した女性の姿を連想すると……実際私が酒を飲んだのは彼女の喫煙のせいではない。これは言い逃れの冗談話にすぎない」(31)。

- 66) 日本に來た当初、蕭軍が「我慢できなくなったら飛んで帰って来い」と言うのに対し、蕭紅は「日本に10年だって住む」(第七信、8.27)と言ったり、「来るのも大変だから、日本語が読めるようになったら帰る」(第十三信、9.9)と言ったりする一方、「1年たっても何も進歩がなさそうだから、数ヶ月にならないうちに帰るかもしれない」(第十四信、9.10)と弱音を吐いたりしている。

- 67) 蕭軍は注釈で、彼女が自分に干渉しすぎると嘆く。自分は農村に生まれ、若い頃には軍事訓練も受け、様々な武芸の鍛錬もしたのだから、彼女とは比較にならない、と。また幸いにも自分は頑丈にできており、もし自分が彼女と同様だったら2人共倒れになっていただろうと言う(32)。だが彼のこの強烈な自尊心が結局蕭紅を深く傷付けることになった。

- 68) 東京在住の友人と思われる。この手紙の終わりにも、沈女士のところに泊まった、と書かれている。

- 69) 蕭軍は、彼女の体の不調は、長期間の生活の苦勞と栄養不良による貧血で、彼女の実母が肺を病んで亡くなったことから見て、遺伝的なものもあるのではないかと言う。また彼女は体を動かすことが嫌いで、加えて神経質でナイーブだったことも影響していると言う(32)。

- 70) 蕭軍は「おそらく日本人の画家が描いた、色付きの魯迅先生の臨終の絵だろう。それは『訳文』に掲載され、その後数千枚印刷されて『訳文』の定期購読者に1枚ずつ配られた。誰かがどうしても欲しければ送る、と言ったのだ」(32)と言っているが、この「日本人の画家」が平塚らいてうの夫、奥村博史であったことが分かっている。米田佐代子「上海に遺る『魯迅臨終の図』 奥村博史・平塚らいてうの平和への願い」(『日中友好新聞』2011.11.15)が以下のように書いている。

1936年10月19日の魯迅死去当日、上海滞在中の1人の日本人画家が魯迅宅を弔問してデスマスクをスケッチ、油彩画にして魯迅夫人の許広平に贈呈した。その画家こそ、今年創刊百年を迎えた雑誌『青鞥』の創刊者平塚らいてうの夫、奥村博史である。

日中戦争により一時は絵の所在も不明だったが、戦後上海の魯迅記念館が所蔵していることがわかった。許広平は1956年来日の際、病気のらいてうを見舞うとともに博史への謝辞を述べている。

この事実は、らいてうの自伝『元始、女性は太陽であった』戦後編(1972刊)に出ているが、最近までほとんど注目されず、絵も常設展示されていないため、記念館を訪れる日本人の目に触れることもなかった。

しかし周国偉『魯迅與日本友人』（2006.9、上海書店）の記述は少々異なる。

1936年10月19日、魯迅が上海で亡くなった。その日、日本の画家奥村博史はちょうど写生のために中国を訪れており、上海に立ち寄ったところだった。奥村は新聞紙上で魯迅の遺影を見、魯迅を心より尊敬する心情から写生板に油彩で「魯迅遺容」を描いた。その後、内山書店店主の内山完造にそれを見せたところ、内山がその油彩画「魯迅遺容」を魯迅夫人許広平に贈るよう提案した。そこで奥村は呉淞路の日本人経営の油絵材料と額縁を扱う店で額縁を誂えた。それからおそらく内山完造がこの絵を彼に代わって許広平に贈ったのであろう。

その後27年の間、奥村はこの額縁のことを気に掛けていた。1963年初夏、知り合いの内山嘉吉（内山完造の弟）が日本出版交流代表団の一員として訪中する際、「魯迅遺容」の額縁が「あまり上等でない」もので、あの油彩画には相応しくないことを思い出した。そこで奥村は内山嘉吉に額縁を中国へ持って行ってもらおうと思ったのである。数日後、奥村は新しい額縁を内山嘉吉に渡し、「額縁を許広平に渡して、以前のものと取り換えて欲しい」と伝えるよう頼んだ。

魯迅逝去後の事柄を詳細に記録した『魯迅先生紀念集』（魯迅先生紀念委員会編、1979.12、上海書店複印：原本は1937年初版）に、奥村が魯迅宅を訪れてスケッチをした、という事実は記録されていない。また『元始、女性に太陽であった』戦後編（1972.10、大月書店）でも、新聞の肖像を油絵で描き、内山完造に請われて「ふたりで魯迅の仮住居に、未亡人の許広平さんを訪ね、さしあげてきた」と言っているのが、基本的情報としては周国偉が真実に近いと言える。

- 71) 蕭軍は彼女の健康を心配して、何度も帰国を勧め、「強がり」はやめろ、と言ったらしい（32）。注33、66参照。
- 72) 第三十信（11.24）で日本語がどんどん進歩しているのが嬉しい、と言っている。
- 73) 1912～2011、黄源夫人。上注7参照。
- 74) 注52参照。
- 75) 原文は“若不愿意重来这里的话”。ここで言う“这里”は、この後の文の表現から見て、日本を指すと思われる。張秀珂は満洲国留学生として日本に留学していた。上注7及び上注16参照。
- 76) 西安事変のこと。「沈女士」は注68参照。
- 77) 蕭軍はこの手紙の注釈の中で、自分が蕭紅を虐待したという、世間で言われているような「事実」に関して長々と言い訳をしており、手紙に書かれた事柄については一切コメントしていない。この言い訳をどこまで信じるかはともかく、夫婦間の力関係において、世間が蕭軍に一方的に負荷を負わせていることに対し筆者は疑問を感じないでもない。彼の反論部分をここに訳出しておく。

彼女と共に暮らした数年を思い起こすと、生活がどれほど苦しかろうと、外部の風雨がどれほど酷く吹き荒れようと、「形影離れず」ということは実現してきた。私はこれまで彼女を「大人」、あるいは「妻」と見なしたり、そうあることを要求したりはしてこなかった。一貫して彼女を子どもとして——ひとりぼっちで頼るところのない、病弱な子どもとして接してきた。私は気性が荒く、外来の、自分の尊厳を傷付けるような人間や事柄に対して、如何なる場合も常に一歩も引かず、そうする価値があるかどうかはさておき、死ぬ覚悟で闘ってきた。しかし弱者に対しては我慢できる。我慢することで涙を流し、自身の体を痛めつけ、傷付けて——例えば自分で自分を咬むとか——までも、爆発しそうな怒りの感情を抑えつける。この苦しみは自分にしか分からない。気づかないうちに彼女や彼らを傷付けていることもあるが、後で自身を憎むその苦しみもまた、自分にしか分からない。

確か上海で「霞飛路」を渡ろうとしていた時だった。彼女が車にひかれないように、彼女の腕をきつく握っていた。後で見ると、彼女の腕には5本の黒い指の跡が付いていた！

またある時、夢で誰かと喧嘩になり、1 発お見舞いした。その1 発が彼女の顔に当たろうとは。翌日彼女の顔に「青あざ」ができていた。そこで皆は私が彼女を殴ったと噂した、これが「証拠」だ、と！

確かに彼女を叩いたことはある。何のために喧嘩したのかは忘れた。彼女は口では私にかなわない。かっとなって私に飛びかかり、つかみかかってきた——その時私はちょうどベッドに腰を掛けていた——私が体をかわすと、彼女は目標を失い、ベッドに倒れ込んだのだ。その時を狙って、私は彼女の太ももに思い切り何発かお見舞いしてやったのだ——これは私が彼女に対して行った最大の身体的虐待で、彼女に対し、一生申し訳ないと思うことでもあるが、これ以外にはない。私たちはしょっちゅう言い争っていたが、済んでしまうと笑い話にした。互いに揶揄し合いながら……。

夫婦のこと、男女のことは、第三者には本当のこと、実質的なこと……の是非を判定できない。いわゆる「清官家務の事断じ難し」とは経験的な言葉である。ほかに目論見があったり、目的があったりしなければ……ほかの夫婦について、どちらか片方の肩を持ちたがるものだ。夫婦の一般的なことは彼ら自身にしか解決できない。他人は、「自分の舌を管理する」のがベストだ。

これは確かに書くほどのことでもない些末なことだ。しかし私は人間として些末なことにも誠実に対処したいと考えている（33）。

注24も併せて参照されたい。

- 78) 第二十六信（122）でも、第2期、即ち来年は個人教授を見つけて勉強しようと思う、と書いている。
- 79) 何を指すのかは不明だが、時期的に見ると『報告』だろうか。注21参照。
- 80) 誰を指すのかは不明。
- 81) 『復活』はトルストイ作の『復活』か。『馬に乗って行く婦人』はD.H.ローレンス作“The Woman Who Rode Away and Other Stories（馬で去った女）”で、1936年10月、唐錫如の訳で、これを表題作とし、上海良友図書印刷公司から、7篇の短編集として出版されている。日本では1935年に宮西豊逸訳がある。
- 82) 上記注77に続き、蕭軍が心中を吐露している第三十四信注も大部分を以下に訳出しておく。

健康な牛と病んだ驢馬が一緒に1台の車を引いたとしたら、その道中と結果において、結局犠牲になるのは体をこわした驢馬ではなく、疲れ果てた牛の方だ！両方が元気であることは難しい。もし一緒にでなければ、牛は牛の道を行き、驢馬は驢馬の道に行く……。

我々は唯物主義者でなければならない。物質の基礎と客観的条件がすべての発展の道筋を決定できるということを軽視できない。我々は現実を超越し、唯心的な、主観的な、精神を第一とする、精神至上主義の観念論者になることはできないし、また自分が「曾て人であった動物」であることを忘れ、自身を「純粹」な物質、「純粹」に動物的な、いわゆる卑俗な唯物主義者に墮落させることもできない。人は道具を創造した動物であり、また倫理観と感情、道徳を以て社会生活を営む動物でもある。健全な理知と美しい情操を有した動物であるはずだ。そうであってこそ「人」というこの概念と名称の、定義及び内包を充実させることができるのである。

私と彼女の間では、自分たちの間に調和させられない様々な矛盾があることは、十分に分かっていたし、理解していた。後の決別は、ほとんど必然であり、宿命的な悲劇として演じられなければならないなかったのだ。共通の基礎は崩壊し、つなぎ止める条件は失われた！……私に残されたのはただ歴史的な回顧の念のみである！蕭紅は、あるいはこの「回顧」についても、自身の記憶の中に留めたり、何かの形式で表現することを望まなかった、あるいは敢えてしなかったのかも知れない。——彼女はそういったものを恐れていたし、憎んでいた！彼女は歴史を超

越し、それによって歴史を否定しようとした、誉れ高い独立した人だった！彼女の当時の現実的な立場からすれば……ここに押し隠された心情を、私は完全に理解できる。

- 83) 第三十二信にも、沈女士のところに泊まった、とある。
- 84) この手紙が実際に蕭紅の手紙に付されていたのかどうかは不明。
- 85) 蕭軍によれば、彼が上海に出て来た後、軍は自分の家の近くに部屋を借りてやり、時々一緒に食事をしたりした、と言う。「私は彼に上海のいろいろな場所を見せ、ほかのことを考える暇がないようにした。また彼の好みを聞いてみると、言語学が好きだと言う。そこでエスペラント学会に連れて行き、エスペラントを学ばせた。私も曾てエスペラントの学習者だったから（ほかの外国語と同様、出来は悪かったが）」(35)。注52参照。